

第一歌『山男』

坊がつるの風に乗れ

昭和三十六年度入学 同期生有志

平成二十五年四月のH.U.A.C岡山例会。参加者四一名という盛会の中、昭和三十六年度入学の同期生が八名を占めていた。絶好の機会である。

「いい歳をして」と笑われるかもしれないが、以前から思い描いていた計画を切り出してみた。

『坊がつる讃歌の元歌は俺たち山岳部の部歌なのだから、坊がつるで本物を合唱しないか?』

飲んでいた勢いでそうなったのか、同期会としてやろうということでした。

どうせやるならミヤマキリシマが咲き誇る時期にしよう。

九州在住の後藤(栄)がコース選択や宿の手配などをやってくれると言う。リーダーは後藤、よろず相談役として田賀、そして 全員への連絡は言い出しっぺの佐々木が受け持つことになった。

当初の計画では大船山を考えていたが、五月中旬に下見に行った後藤から、しんどさと花の多さを考えると 平治岳(ひいしだけ・1642・8m)の方が良いとの連絡が入る。



六月六日午後四時。

国民宿舎「久住高原荘」に同期の参加者九名が集まった。

中には三〇年、五十年ぶりの懐かしい顔もある。握手で再会を喜び合う。

温泉に浸かった後の発会式から一部屋に集っての宴会まで、学生時代の気分に戻り 大いに語り合い 盛り上がった。

六月七日早朝。神成・土師は体調のこともあって宿舎に残ることということで、七名で長者原を出発。

「坊がつる讃歌」の舞台を経て大戸越着。右に大船山、左には九重山系きつてのミヤマキリシマの名所 平治岳の南峰が、すぐ目の前から鮮やかなピンク模様の絨毯

を敷き詰めたように迫っている。

シーズン中の混雑緩和策として、登りと下りは別の道にしてあるが、いずれも行列状態である。

頂上まであと一ピッチ。

さあ我々もひと頑張りするか。

南峰を登る急勾配のジグザグ道も、稜線沿いのなだらかな道も、両脇に咲く花がしんどさを忘れさせてくれるくらいに美しい。



快晴の青空とそよ風。ミヤマキリシマの中から浮き出ているように見える三俣山。絶景である。

頂上付近には 腰を下ろせるくらいの平坦な所はかなりあるのだが、常に数百人が動く状態であった返している。まとまって昼

飯を食べる場所の確保が難しい。やつとスペースを見つけ腰を下ろした。高野がカップ麺とコーヒーを振舞ってくれた。人数分のカップを並べていたはずなのに一つ余っている。後藤がいないことに気がついた。



花の谷間に座りこんだため、場所探しに戻った彼には見えなかったのだろう。彼も我々を探しているに違いない。大声で名前を呼んだり手分けして動いてはみたが、この満員状態の中ではどうすることも出来なかった。そこは元山岳部員、心配することはない。多分、先に下って待っているだろう。飯を

食い終わった後 見晴らしのきく場所に行ってコールサインをかけてみた。

はるか下の大戸越の人混みの中に、一人だけ白いタオルをぐるぐる振り回しているのが見えた。五十年前に北アの稜線で部員同士が交わっていたコールサインが今でも立派に機能したのである。これも特筆すべきことであろう。我々のはインディアンコールと呼ばれているものと後藤が教えてくれた。

大戸越から下ったところは、坊がつるの中でも乾いた草原でキャンプ場となっている。



そこには色とりどりのテントが適度な間隔で設営されている。

我々はその近くの盛り土状の小高い場所にザックを下ろした。

運よく風上の位置である。下ってきたばかりだろう、いくつかのグループ数名ずつがかたまつて腰を下ろし楽しみに談笑している。

『さあ 始めるぞ』

七名が立ち上がり、田賀が大声を張り上げた。

『皆さん、失礼します。我々は

広島大学山岳部OBの同期生の集まりです。この中には五〇年ぶりに再会した男もいます。これから我々の部歌を唄います。』

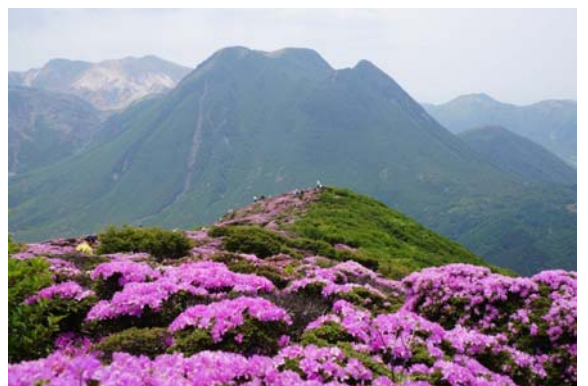
誰かが『アイン ツヴァイ ドライ』

『銀座のチムニー 背中が滑るよ 黒なめらは足が滑るよ・・・』

先ずは、呉市の天応ロックハイツを唄った第二歌から。何事が起こったのだろうかといった表情で周囲の人たちが我々の方に顔を向けた。続いて今回のメインの目的にしていたお馴染みの第一歌。

『同じ山への憧れを 胸に抱いてゆく道は 教えの道ぞ山男 広島高師の山男・・・』

歌詞は異なるが、紛れもなく『坊がつる讃歌』の元となった正調のメロディ。山岳部入部以来、姿勢を正して唄った部歌である。七〇余歳の男たち。それぞれが歩んできた半世紀の思い出に浸



りながら真面目に唄うシャガレた歌声。その歌声はフワッと通り抜ける風に乗って坊がつるの草原を心地よく流れ広がった。神さまがいきな計らいをしてくれているのかもしれない。

『……同じ教えの道をゆき 険に浮かぶ山の道 道は一つぞ山男 広島高師の山男』

遂に結びの六番までを唄い終えた。

『大変お騒がせしました。やっと念願のこの場所で唄うことができました。有難うございました。』

全員が頭を下げ 挨拶を終えると同時に温かい拍手に包まれた。『アンコール』の声も聞こえる。

我々に近い世代の人たち何名かが近づいて話しかけてきた。

その人たちの中には八〇〇m級の山に登った経験を持つという女性もいる。

集合写真も快く撮ってくれた。

『坊がつる讃歌の元歌が広島大山岳部の部歌だということを知ってはいましたが、まさかこの場所で本物を聞けるとは思いませんでした。感激しました。』
『よかったですよ。できたら毎年来て歌ってください。』
『五〇年も昔の仲間、それも同



期の部員の方たちが、しかもこの場所にこれだけ集まること自体がすごいことです。元気をもらいました。』等々。
たとえそれがお世辞であったとしても、我々にとってはそれまでの疲れが吹っ飛ぶ程に嬉しかった。

思いは果たせた。天候も味方につけて二百%の大成功。

正に至福のひと時と言ってもよからう。

七名はそれぞれにこの時思っていた。

神成・土師もこの場所についてほしかった。山に登れないことが最初からわかっているのに、この日のために体調を整え遠路から参加してくれた彼らと一緒に、この爽快感を共有したかったと。彼ら二人の勇気ある参加が、全体の士気と一体感を高めてくれたことは間違いない。改めて感謝したい。

ちなみに、長者原に帰り着いた時、高野がセットしていた万歩計は約32,000歩。ほぼ十時間の行動時間であった。

あとはセミプロのカメラマン池田から送られてくる写真を楽しみに待っただけである。

(平成二十五年六月 佐々木記)

今回の参加者

No.115 池田 勝彦 No.117 高野 葵

No.118 後藤 栄一郎 No.119 佐々木 稔

No.120 田賀 雅文 No.122 神成 三平

No.124 西田 哲次 No.125 土師 英樹

No.128 別府 武志